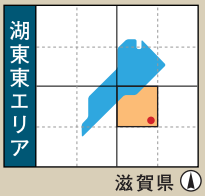
NO.053

史跡

県指定

作谷窯跡（つくりやようあと）

日野町中山　平成元年3月31日指定



土師器（はじき）や須恵器（すえき）のような土色の土器しか無かった時代に、鮮やかなグリーンの焼物が現れた時、人々は驚きと感動の眼差しで見つめたことでしょう。唐三彩に起源を持つ緑釉陶器（りょくゆうとうき）は、平安時代に京都、近江、愛知を中心に生産されました。作谷窯跡は、滋賀県で初めて明らかにされた、緑釉陶器の窯跡です。

当時のできごと	
752年	大仏開眼
794年	平安京に遷都
999年	藤原道長の娘 彰子入内

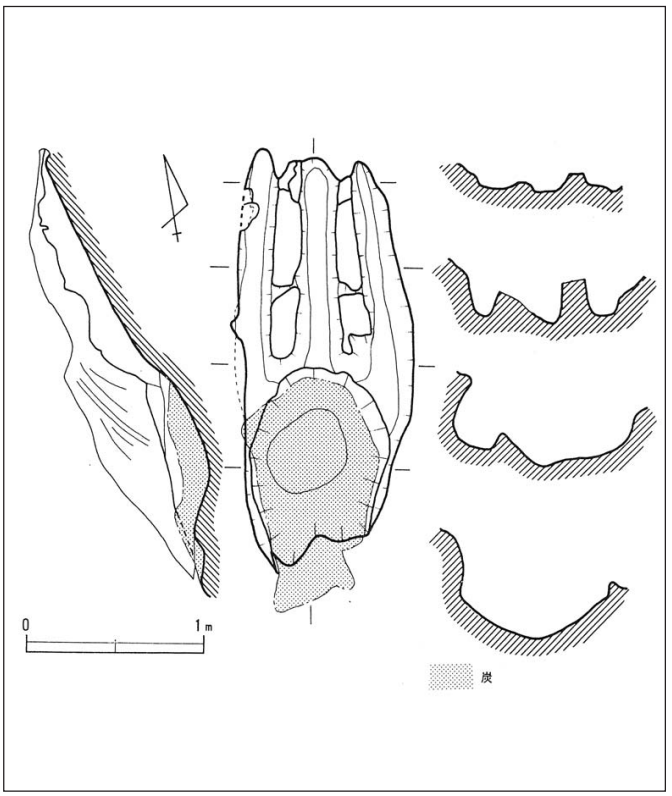
緑釉陶器について

緑釉陶器は、素焼きの土器の上に、鉛を主成分として微量の銅などを加えた釉薬をかけ、再び窯で焼き上げた土器で、緑色に発色します。銅の代わりに鉄を加えると黄色になり、何も加えないと無色透明となります。この3色の釉薬を使い分けたのが三彩です。起源は7世紀に伝来した唐三彩で、これを国産化したものが奈良三彩です。三彩は、希少価値の高い貴重品として、奈良時代の宮、官衙、寺院などでわずかに用いられました。

緑釉陶器は奈良時代にも少量認められますが、需要、生産が増大するのは平安時代に入ってからのことです。



作谷窯跡全景



作谷窯跡実測図

緑釉陶器の生産と流通

現在までに知られている緑釉陶器の生産地は、京都、滋賀、愛知県で、この地域が緑釉陶器の3大生産地として知られており、ここで生産された製品はほぼ全国に流通していることが、各地の発掘調査で明らかとなってきました。これらの生産地での窯の数は、京都産が約14遺跡、東海産（愛知）が約13遺跡、近江産が約7遺跡確認され、それぞれの地域で、製品の形や窯の構造に異なる特徴を持っています。

近江産の緑釉陶器の生産遺跡で確認されているのは、八日市市の十禅谷窯跡、黒丸窯跡、水口町峰道窯跡、山の神窯跡、春日北窯跡、日野町の作谷窯跡などです。このうち、詳細な調査が行われているのはこの作谷窯跡のみです。

作谷窯の構造

平安時代の10世紀後半に操業していた一種の窖窯（あながま）です。近江産緑釉の窯跡にあって、灰原と共に窯本体の調査を行った数少ない事例です。

この窯は、南側に焚口があり、規模は幅約1m、残存長約2.3mの小規模なもので、天井は失われていましたが、焚口から焼成部の奥まで良好に残っていました。前方に焼成部があり、この後方に2本の畦で仕切られた3条の火道があります。窯詰は、この畦の上に焼台を置き、その上に製品を並べたと考えられます。5個を重ねて焼いたとすると、畦1条に5列並びますので、1回に50個の製品が焼成できたと考えられます。

発掘調査では、失敗した製品や、焼成の際に用いた窯道具なども出土しています。



出土した緑釉陶器



出土した緑釉陶器



作谷窯跡現況

関連する文化財

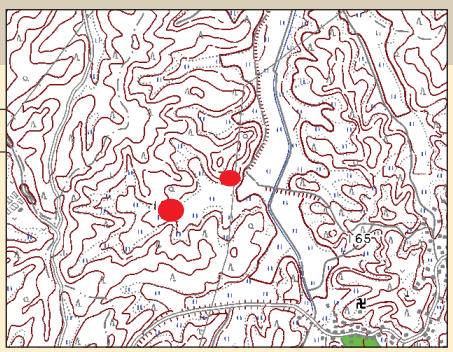
十禅谷窯跡（八日市市）	近江型緑釉陶器の生産遺跡
黒丸窯跡（八日市市）	近江型緑釉陶器の生産遺跡
峰道窯跡（水口町）	近江型緑釉陶器の生産遺跡
山の神窯跡（水口町）	近江型緑釉陶器の生産遺跡

もっと深く知りたい

日野町教育委員会	☎0748-52-6566	蒲生郡日野町河原470
愛知県陶磁資料館	☎0561-84-7474	愛知県瀬戸市南山口町234

作谷窯跡へのアクセス

近江鉄道　日野駅下車
名神高速道路　竜王インターまたは八日市インター



【参考文献】〔近江の遺跡〕（財）滋賀県文化財保護協会　〔作谷窯跡発掘調査報告書〕日野町教育委員会

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　平成16年3月